

人魚姫才ニキス

作者：エリー

海の底

むかしむかし南の海の底に人魚の国であるブラック王国がありました。

人魚たちは、弱い魚を守る代わりに家畜として育てていました。

家畜である魚たちが襲われないように乱暴な魚から守っていました。

弱い魚たちの世話をするのは女の人魚の仕事でした。

乱暴な魚と戦うのは男の人魚の仕事でした。

しかし、ブラック王国の人魚姫オニキスは、槍を手に先頭に立って戦っていました。

肩で無造作に切られた黒髪はサラサラと美しく、少し吊り上がった目は慈愛に満ち、紫がかったピンクの唇は愛らしく、貝殻のように白く輝く肌は透明感にあふれ、大変美しい姫でした。

人魚姫オニキスが率いる男の人魚たちは強く、瞬く間に海は人魚のものになりました。

最後まで抵抗したのはサメの一族でした。

サメたちは人魚たちが保護している弱い魚たちを狙ってブラック王国の海の牧場に攻め込んできました。

戦いは激しく、たくさんの人魚とサメが死にました。

人魚姫オニキスは最前線で一番大きなサメと戦っていました。

長い戦いの末に気力を振り絞ってオニキスが一番大きなサメに槍でとどめを刺しました。

それを見た周りのサメたちが逃げ始めました。

静けさの戻った戦場で負傷した人魚の救出が始まりました。

すると見回りの兵士がカリガリに痩せた小さなサメの子どもを発見しました。

サメは目を閉じ、苦しそうにエラをひくつかせています。

見ると人魚のヤリの傷ではなく、仲間のサメの歯の跡でした。古い傷もたくさんありました。

小さいサメは仲間にいじめられていたのです。

憐れんだ人魚姫オニキスは、回復させる力がある自分の血をサメに与えました。

するとサメの傷がみるみる消えて目を開きました。

なんとその目は真っ赤だったのです。

人魚姫オニキスは、サメにルビーと名づけました。

小さなルビーはオニキスになついていつでもどこでもついてきました。

しかしルビーの体はどんどん大きくなっていきました。

女の人魚たちはルビーを恐れるようになりました。

人魚姫オニキスはルビーをかばってみんなを安心させようと思いました。

しかし、人々の不安は増していくばかりです。

自分の存在が人魚姫オニキスを困らせていることを悟ったルビーはそっとブラック王国をあとにしました。

首飾り

乱暴な魚から守られていたブラック王国を後にしたルビーは、また仲間のサメにいじめられる日々を過ごしました。

見かねたサメの長老が、サメの一族に伝わる秘伝の薬を与えて、ルビーを人間にしました。

愛する人が、他の異性と結ばれると海の泡になる恐ろしい薬でした。

サメから人間になってもオニキス以外は愛しないと誓ったルビーは怖くありませんでした。

なぜならオニキスは戦う人魚姫で恋とは無縁だったからです。

ルビーは南の島国であるブルー王国にたどり着きました。

ブラック王国とブルー王国は昔から仲がよく、交易が盛んでした。

人魚たちは、育てた魚を人間に売っていました。

人間たちは、作った道具を人魚たちに売っていました。

ルビーはブルー王国で装身具職人に弟子入りしました。

器用なルビーはめきめき腕を上げて豊かな暮らしを手に入れました。

すっかり慣れたころブルー王国で王子サファイアの誕生を祝う祭りの開催が決まりました。

場所は人魚たちも参加できるように海の上が選ばれました。

ルビーは、もしやオニキスも現れるのではと王子サファイアと人魚姫オニキスにお揃いのプラチナとダイアの首飾りを作って献上しました。

ブルー国王は大変喜び、ルビーを祭りに招待しました。

この赤い瞳を見てサメのルビーと気づくかもしれない。

ルビーは再会への期待に胸を弾ませて祭りに出かけました。

ところが、オニキスは自分を見てもくれません。

生まれたばかりの王子サファイアを慈しみ、抱き上げて愛情深く抱きしめるのです。

ブルー国王が、ルビーが献上した首飾りを王子サファイアと人魚姫オニキスにかけると二人はまるで恋人のように見えるのです。年の違いも種族の違いも超えて深く結びついていました。

ルビーには王子サファイアの成長を仲睦まじく見守る人魚姫オニキスの姿が浮かびました。

かつて自分がその地位にあったのに、今はもう居場所がない。

悲しみに暮れたルビーは、北に向かい、雪の舞う大国ホワイト王国にたどり着きました。

するとホワイト王国でも王女パールの誕生を祝う祭りの開催が決まりました。

ルビーは、王女パールにもプラチナとダイアの首飾りを献上しました。

するとお礼に王室に招待されました。

王女パールはプラチナとダイアの首飾りとルビーの赤い瞳を大変気に入りました。

ルビーが帰ろうとすると服をつかんで離しません。

ルビーは王女パールの世話係として王室に召し抱えられることになりました。

婚約

王子サファイアは、青い瞳のかわい青年になりました。

ふわふわした銀色の髪は柔らかく、少し垂れた青い瞳は優し気で、日に焼けた浅黒い肌はつややかで健康的でした、

王子サファイアは魚を売りにやってきたオニキスに会うため、毎日港に向かいます。

港に着くと服を脱いで水着になり、岩の上で待つオニキスのところまで泳いでいきます。

無口な二人は視線を交わすだけで分かり合えました。

同じ場所で同じ時間を過ごすだけで幸せだったのです。

しかし、年頃になった王子サファイアには、ホワイト王国の王女パールとの婚約話が持ち上がっていました。人魚姫オニキスを愛する王子サファイアは縁談を断るつもりでした。

周りの人々も二人が愛しあっていることは分かっていました。

ブラック王国の人魚たちは「王子サファイアが人魚だったなら！」と言いました。

ブルー王国の人々は「人魚姫オニキスが人間だったなら！」と言いました。

しかし、オニキスは人魚で、サファイアは人間です。結ばれない定めでした。

人魚姫オニキスは、自分の血を与えれば人間が人魚になることを知っていました。

しかし、王子サファイアに教えませんでした。ためらわず人魚になると知っていたからです。

そのころ、ルビーに甘やかされて育った王女パールも婚約話に不満でいっぱいでした。

金色の髪を結びあげ、黄色がかった緑の瞳に好奇を光らせ、バラ色の唇を尖らせて、かわいらしい小さな顔にたくらみをひそめていました。

王子サファイアを値踏みするため、町娘に扮してブルー王国に行くというのです。

もし王女パールがブルー王国に嫁いだならルビーもついていくことになっていました。

ルビーは、オニキスに会いたい。

しかし、王子サファイアと仲睦まじい姿は見たくない。

けれども王女パールを一人ぼっちにはできない。

ならば、人魚姫オニキスと王子サファイアの仲睦まじい様子を見て、王女パールから断ったらよいと考えました。王

女パールのたくらみにのり、ブルー王国に連れて行きました。

町娘に扮した王女パールは、港に向かう王子サファイアを大通りで待ちました。

馬に乗った王子サファイアを見た瞬間、王女パールは恋に落ちました。

なんて素敵な青年なんだろう。かっこいいと思いました。

思わず後を追いかけると、岩場で待つ人魚姫オニキスが目に入りました。

王女パールは美しい人魚姫オニキスを見て負けたと思いました。

二人の仲の良さが悔しくて涙を流しました。

ルビーもまた心の中で涙を流していました。

横恋慕

人魚姫オニキスの幸せを願い、そっとブラック王国を出たルビーは、王女パールもまた王子サファイアの幸せを願ってあきらめると思っていました。

ところが王女パールは違いました。

婚約の条件として「人魚姫オニキスに二度と会わない」を突き付けました。

それを聞いた王子サファイアは、断固拒否しました。

怒った王女パールは、「婚約を拒否すればブルー王国を攻撃する」と宣言させました。

いつの間にか、平和のための婚約が、国の威信を賭けた戦いに発展していました。

苦しい交渉の末に、「王子サファイアは人魚姫オニキスと口をきかない」で決着しました。

そんな事態になっていることは全く知らない人魚姫オニキスは何も言わない王子サファイアを不思議に思いました。

しかし、王子サファイアがそばにいてくれればよかったので満足でした。

かつてかわいがっていたサメのルビーのように突然いなくなることだけが不安でした。

「相変わらず仲睦まじい」と報告を受けた王女パールはヒステリーを起こしました。

ルビーは、人魚姫オニキスと王女パールの幸せ、どちらを願っているのか分からなくなりました。

王女パールはホワイト国王に「人間のわたしより人魚を愛するなどホワイト王国は侮辱されたのです。ブルー王国を許してはなりません！」と訴えました。

こうしてブルー王国とホワイト王国の戦いが始まりました。

王子サファイアも武装して戦場に出ました。

出陣を聞いた人魚姫オニキスは、魔法の薬を求めてサメの長老に会い、人間になりました。

愛する人が他の異性と結ばれたら海の泡になってしまう薬と知っていて飲みました。

覆面で顔を隠し、槍を持ち王子サファイアのもとに駆け付けました。

息の合ったオニキスと王子サファイアの攻撃でホワイト国を圧勝しました。

ブルー王国が勝ちを確信した時、何万もの軍隊を率いたホワイト王国が現れました。

そして、王女パールが現れ「わたしだけを愛さないなら死ぬまで戦う」と言い放ちました。

王女パールの際には苦し気な顔をしたルビーが寄り添っていました。

事情を察したオニキスは王子サファイアに王女パールを愛するようにすすめました。

覆面でもっていたのでサファイアはオニキスに気づきません。

平和を望むブルー王国とホワイト王国の兵士たちも同調しました。

そして、誰とはなしに王女パールの名を叫びました。

「王女パールをお妃に！」

全員の熱望に負けて、王子サファイアが小さくうなずきました。

愛の行方

王子サファイアが王女パールの前にひざまずき、手の甲にキスしました。

するとオニキスが苦しみ始めました。

王子サファイアが覆面をとると優しい眼差しのオニキスの顔が現れました。

ルビーはオニキスの足元にすがりつき叫びました。

「愛するものに選ばれないと海の泡になる魔法の薬で人間になるなんて！」

王子サファイアは国のためにオニキスを裏切ったことを激しく後悔しました。

そして、一生の誓いをするため、オニキスの槍で胸をついて後を追いました。

「愛するはオニキスただひとり」

泡になりかけたオニキスに血まみれの王子サファイアが覆いかぶさりました。

するとまばゆい光が広がり、オニキスが人魚に戻りました。

血まみれの王子サファイアを見て、人魚姫オニキスは自分の血を与えました。

王子サファイアの傷がみるみる治っていきました。

しかしその足は失われ、人魚になってしまいました。

オニキスは「わたしを助けるためにごめんなさい」と言いました。

サファイアは「かまわない。これで俺たちはやっと結ばれる」と言いました。

オニキスとサファイアは抱き合い、復活を祝ってキスをしました。

するとルビーが苦しみ始めました。

どんどん体が泡になっていきます。

「オニキス・・・」

ルビーが消え入りそうな声で呟きました。

「その赤い目、もしやお前はサメのルビー？」

オニキスが自分を覚えていた喜びのあまりルビーは涙をこぼしました。

そしてオニキスとサファイアとパールのプラチナとダイアの首飾りを指さしました。

「わたしの愛した人たち、どうか仲良くしてください・・・」

がっくりと膝をつく王女パール。

「ルビーがサメだったなんて。しかもわたしではなくオニキスを愛していたなんて」

さめざめと泣き崩れる王女パールを抱き寄せるオニキスとサファイア。

オニキスが言いました。

「お互いに気を使いすぎて傷つけてしまった。もっとはやくサファイアを人魚にしていたなら。もっと早くルビーに気づいていたなら。あなたを悲しませなかったのに。ごめんなさい」

オニキスと友情を誓った王女パールは兵を引き上げてホワイト王国に帰っていきました。

オニキスとサファイアはブラック王国で未永く幸せに暮らしました。